
足抜け花魁の珍道中

天呼 洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足抜け花魁の珍道中

【Zコード】

Z9897T

【作者名】

天呼 洸

【あらすじ】

時は江戸時代……

『白鶴太夫』と言われた花魁がいた。

十三年と月日が経ち、花魁の『花』字の御徳、誰にも見向きもされなくなり、返済金も返せなくなつた白鶴……

女郎家業に嫌気がさし、計画してた『足抜け』を決行し旅を始める。

狸の恩返しや、間抜けな役者……様々な珍事件に巻き込まれ、お気軽道楽に旅を続ける花魁。

でもそんな白鶴、
実は……

花魁『白鶴太夫』（前書き）

色々思う処があつて、書き直しました。
兎に角、気持ちいい馬鹿話を書きたいと思つてます。
基本的に前作内容は変えてません。ここまで
誤字等は後日修正します…… ZZ ZZ ZZ ZZ ZZ

花魁『白鶴太夫』

アタシが初めて江戸の吉原に着たのは、今から十三年前……

貧乏で借金塗れで有名な尾張のインチキ和尚に「お雪。江戸まで行つて芝居を観ないか?」つと突然誘われた。

何故アタシが誘われたかは、偶々でも偶然でもなく、そのインチキ坊主と一緒に暮らしてたからだ。

まあ、兄弟でも夫婦でも無いんだけど……アタシがそのインチチ坊主の寺に居候? してたのがいけなかつたのだろう。

半ば強引に和尚に手を引かれ、東海道を歩きながら食べたり飲んだり、和気藹々と旅をしながら、江戸に到着する。

さあ、歌舞伎座に一直線つと思ひきや、何故か吉原まで和尚に力強く手を引かれ連れてかれる。

「つと言つ訳で、スマンなお雪
「……は?」

謝りの言葉を言いながら全然悪びれてない顔で和尚は笑つて言つ。江戸に着いてから、和尚の態度の変貌に戸惑いを隠せないアタシは、鳩の目のように呆然と和尚を見つめる事しか出来なかつた。

陰気臭い和室に、陰気臭い女性が煙草を吸いながら上座にドッシリ腰を下ろし、アタシを舐めるように見ている。

「中々の上玉じゃないか尾張の田那」

煙を吹かしながら女性は和尚を褒める。

「でしょ? 女将? だからお願ひしますよ~」

和尚はその陰気臭い女性を『女将』と呼びペコペコと頭を下げる。

「ふん。 しょうがないねえ。 ほら受け取りな」

「有難う御座います」

女将は横に置いてあつた千両箱から一十両ほど取り出し和尚に渡す。

「旦那、坊主くせにいい目してんじゃないか。こんな上玉を……神さんから罰が当たつても知らないよ」

つと女将が悪そうな顔してニヤニヤ笑いながら言つと、和尚はへツと鼻で笑いながら……

「神様が怖くて和尚が出来るかつて言つの……怖かつたらお雪なんか売らないつて」

つと受け取つたお金を懐に仕舞つ。

そんな二人のやり取りを見ながら、アタシは呆然としてると、女将が煙草盆の灰吹きのふちを煙管で叩き、ふうっとまた煙を吹かしながら、アタシを見る。

「お雪だつたかいアンタ？まだ気付いて無い様だから言ひつけど、アンタね……その和尚に売られたんだよ」

……ツ――！

つと、まあ……少し考えれば和尚が江戸に連れてつてくれるだけで怪しいつと思つてはいたが……まさか、アタシを売る為に江戸に来るとは思いもしなかつたわ……

勿論、売られた分かった直後、和尚に一・一発殴り飛ばしその場で大暴れ。外で待機していたヤクザ者が暴れるアタシを取り押さえよつするが、そんなヤクザをアタシはタコ殴りにする。

暫くして落ち着き、和尚はアタシがヤクザ者をタコ殴りにしている隙に、さつさと逃げてしまい、行く所が無かつたアタシはこの吉原『花鳥屋』で『お雪』から『白鶴』と名を変えて働く事にした。

それから十三年……

なんだかんだで、半年ぐらいで花魁の『太夫』までアタシは昇り詰め、女郎家業で最高潮を味わつた。

しかし、十二年も月日が経てば、太夫とは言え、指名客は減り、花魁の花の字御徳、枯れた花の様な目でアタシを見る。

足を洗つてどこか旅したいつと思つても、この十三年働いているのにちつとも返済金額に到達出来ない。……宿泊料とか食事代、衣装代等なんやかんやで、女将がお給金から持つていきやがるんだ。

一層の事、足抜けしようと考へてはいるのだが……女郎家業で足抜けは至難の業。店の前でヤクザ者が昼も夜も見張つており、抜け出すにも難しいのだ。

それに、足抜けしても地回りがしつこく追つかけて来るので逃げる方も色々大変である。

日々なんかいい名案は思い浮かばないか、悩んではいるのだが……

今夜も指名が無く暇なんだろうなあ……つと夕方位の時、花鳥屋のお抱えヤクザ『三郎一家』の三郎、与助を捕まえ店外でアタシは暇潰しに将棋を指してみた。

勝負は与助がいとも簡単にどんどん責められアタシが一方的に優勢。

「……くつそ……ちつくしょー……どーしたらいいんだ?」

「……ふあわあ~……」

与助は将棋盤を真剣に見ながら次の手を悩む。そんなアタシはあまりにも弱い与助に欠伸をし、吉原で女を買う客達を見つめる。

数年前位はアタシも人気があつて、どこぞの殿様や御武家様、金持ち商人に相手にして貰つたのに、今やこうして外でヤクザと将棋しても誰も相手にしやしない……本当、寂しくなつたもんだよ……

「あ~くそッ! 太夫ッ! 何持つてるんだい?」

考へに煮詰まつたのか、与助はアタシに捕つた駒を尋ねる。

その問いにアタシは嫌気が差し、ハンツと溜め息を吐く。

「いい加減にしなよ。何度もだい? いいかい。桂馬、香車、角に金

将と銀将、歩が3つ……」

捕つた駒をアタシは苛立ちながら、順番に与助に見せて行く。そして最後に捕つた駒をバシッと今座っている腰掛に叩いて見せる。

「王将ッ！！」

「王将！？太夫、俺の王将捕つちゃったの！？」

鳩が豆鉄砲でも喰らつたかの様な啞然とした表情で与助は甲高い声を出しながら王将とアタシを見る。

実は勝負は既に着いている……前の手でアタシが与助の大手飛車取りつと攻めたら、この与助「バカそうは問屋が下ろさせねえ」つと王将では無く飛車を逃がし何故か続けていく。

どーしていいのか分かんなくなつてしまつたアタシは仕方が無く適当に続いている。

「はあ……与助。もういいだろう？」

呆れたアタシは与助に勝負の終止を促すが……

「いやいや太夫。こーなつたら何が何でも飛車は取らせねえ。王将が無くつたつてこの勝負勝つてやらあ～」

つと何がコイツを熱くするのか、ますます意気込んで勝負に滑り込む。

頭が痛くなりそう……

呆れて溜め息吐きながら再び吉原で女を貰う客を眺めていると……

隣の店から知り合いの飴細工職人『小次郎』が出てくるのが目に入つた。

しかも客が出入りする専用口では無く、裏口からだ……
妙だな……つと思いアタシは小次郎に声を掛けたくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9897t/>

足抜け花魁の珍道中

2011年6月11日04時40分発行